

庭の花々

水仙は去年の小叢の同じ位置



水仙

牡丹の芽 風に乱れぬ高き哉

ぼうたん

牡丹を妻の案じて雨催い

あめもよ

牡丹の柔し花芽の舞い姿



牡丹



牡丹の芽 老夫婦の声日々聴きて
椅子寄せて牡丹の新芽守りけり

牡丹園 庭椅子二つ並べあり

我が庭の牡丹に向かう椅子二つ

ぼうたん

牡丹の紅色土に還りたり

牡丹散り大地再び冷ゆるかな

ぼうたん

牡丹の女装を解きて横たへり

ぼうたん ほのおほぐ

牡丹の焰解れて地に還る

ぼうたん

牡丹の脱ぎし衣の八重二十重

五年振り咲きし牡丹の巨大なり

今朝聞く牡丹俄かに艶姿

あで

咲きつゝも崩る気配の牡丹かな

身に余る花弁の重さ牡丹落つ

命萌ゆ 萱葉の芽の真昼かな

しゃくやく

萱葉の葉火解れて地へ還る

ほぐ

かえ

星屑となりて散り數く沈丁花
沈丁の花の終わりの香の咽る

沈丁花



沈丁花 香りに咽むせて花終わる
沈丁花散むせり落ちる頃 陽差し濃し

芍薬の茎の細さに花重し
茎細く大芍薬の傾きぬ

芍薬の崩れて大地溼らなり
芍薬の冷たき花弁拾いけり

芍薬



アマリリス 顔背そむけ合いい二輪咲く

二重唱聽こえ アマリリス振り返る

蛇苺 僮はかせき花や蛇を待つ

春浅さきタラの木の棘とげ 柔らかき

山独活うの若芽よを避よけて草を刈る

独活うの株 移いし終よへれば爪割れる

桜蘭さくらん小さき花片 は彈はじけ合いう

芥子けしの花 か細く揺れて毒含む

なでしこのひとかたまりに光滿よち

コスモスの同じころに吹き揺れる

コスモスの色に触れつつ風の道

寄る風に色ある如いし秋桜

紫陽花あじやなづの日々に臘ふくらみ時ときおそし

どくだみの花のひかりの吹き溜まり
十葉の群れて小さき家守る

じゅうやく



雨しだき 紫陽花栄華 地に垂れる

そばえ

庭覆う紫陽花色の日照 雨かな



十薬を飲んで難無し老い二人
十薬や風の重きの溜まり場所
暮れ残る十薬の花 愁思かな

花白くドクダミの名を給わりし
十薬の花あるとこう暮れ初めし

孤高なる赤さを恥じて曼殊沙華



曼殊沙華

向日葵の前世の記憶今年又

向日葵の寂しき高き咲きほこる

庭の椅子ミニートの香る場所に有り



鉄線

テツセー^ンの折れるばかりの茎壓^し
山桃を食え^ば幼き日^の記憶
山桃を踏んで巨木^を仰ぎ見る

返り梅雨^{あざみ} ドイツ薊^{アザミ}の花怒^る

梅雨明けのアンティチヨーク^{（くき）}の茎太^る

紫蘇^{（しそ）}の香の残る小指^{（ほじ）}で鼻穿^る

穹^{（おおぞら）}へ 蒲公英^{（たんぽぽ）}の絮吹^{いて}いている

芝桜^{（しばざくら）}ひかり湧^{き出}づ小道^{かな}



芝桜

白粉花の黒き実の飛ぶタベかな

おしろいこぞ

白粉花は去年と違わぬ樹の下に

白粉花のタベとなりて水を打つ



白粉花

薔薇一輪オフイリアといふ名の運命して

うら

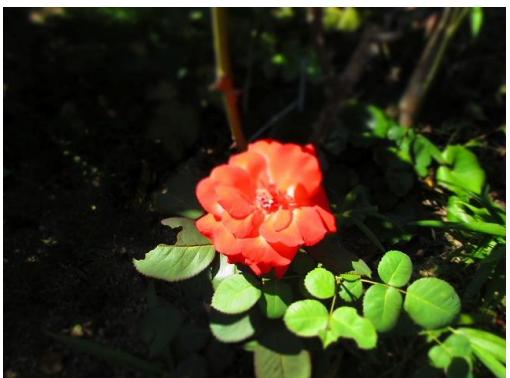
とげ

何恨むはかなき棘や薔薇猛る

冬薔薇の咲いて小庭の温みかな

ねく

春愁の一一本の薔薇剪りにけり



風に散り　木香薔薇の黄絣籠

つる

窓覆う蔓薔薇の葉の真青なり



モツコウ薔薇



花終わり今年の吾の歳終わる

のうぜんか

凌霄花毒ある貌と思わざる

もや

朝靄に花大根のひかり満つ

遙光に踊るいのちの花大根

せんにちこう

千日紅搖すり絞まる風の色

から

野牡丹の花の高さや青さ空

はおざき

鬼灯に夕下風の触れてゆく

ほおづき

鬼灯の色々の赤彩づけり

鶏頭を指て揺らせば揺れ止まづ

鶏頭の重き終わり引き抜きぬ



鶏頭

鶏頭を抜き取る束の手に重し

草の中今年の貝母の新芽あり

うつむ

こぞばいも

俯きて空を見ずして貝母咲く

人の顔見ずに貝母の花終わる

ばいも



貝母(編笠百合)

首垂れて編笠百合のうすみどり

のうせん

凌霄の毒に酔いたき蟻子来る

百年の朽木にいのち苔の花

こけ

馬酔木咲く万の釣鐘音もせず

梔子の朝の白さの汚れ無き

梔子の花や白磁の艶もあり

百年の朽木にいのち苔の花

こけ

馬酔木咲く万の釣鐘音もせず

あしひ

花蘿は揺れつゝも陽に向いており

にら

初物の殊更苦き落の薹

考える裳袋の真昼かな

夕風に裳袋の灯りけり



紫袋

庭の隅 薄紫の萩明かり

はら

枯れ萩を掃えば辺り寒に入る

六十路過ぐ吾に優しき雪の下

遠き日の贖罪灯す浮吊木

のうせん

凌霄の毒に酔いたき蟻子来る

こけ

百年の朽木にいのち苔の花

あ
し
び

馬酔木咲く万の釣鐘音もせず